

---

---

# ミシェル・フーコーにおける「実定性」について

重見 晋也

〈名古屋大学〉

---

## はじめに

解釈学が、古代ギリシアに始まり、特にホメロスの作品解釈の問題を中心にして、テキスト研究あるいはテキストの意味の研究という長い伝統を誇っていることについては、われわれの見解は一致している。解釈学研究には、その先史時代<sup>1</sup>から、二つの異なる態度が内在していた。紀元前1世紀のアレクサンドリア学派は、テキストの中に字句通りのあるいは文法的な意味を探し求めたし、このアレクサンドリア学派と同じ時期のペルガモの学派は、彼らとは対照的に解釈困難な場合には寓意的な意味、アレゴリカルな解釈に依拠することを容認した。このように、われわれは、文法的な厳密さを旨とする文献学と意味の複数性を追い求める解釈学という二つの学問の原型を認めることができるのである。解釈学の歴史は16世紀におけるプロテスタントによる宗教改革の時代にいたるまで、これらの二面性を融和させようとする長いプロセスによって構築されている。すなわち、われわれが文献学による文法的解釈と解釈学による寓意的解釈の間に融合点を見つけようとすることは、この系譜に自らを位置づけることを意味しているのである。

ところで、本稿において『言葉と物』(1964) および『知の考古学』(1968) におけるミシェル・フーコーの実定性という概念を取り上げるのは、これら二つの作品を通してフーコーが明らかにしている布置という考え方を、「実定性」という少々古めかしいこのことばに対して加える文献学的な視点からの省察を通じて、この解釈学的融合の中にわずかなりとも差し挟みたいと考えるからである。

## 1. コントにおける「実定性」の概念——『実証的精神論』

フーコーによる「実定性」の概念化の考察に入る前に、まずその名が告げられなければならないのは、オーギュスト・コントであろう。というのも、すでにこの概念を「古めかしい」と述べたように、この「実定的」(あるいはコントの文脈では「実証的」とするべきであろうが) ということばは何よりもコントとその哲学を直接参照することになるからである。壮大なプロジェクトであった『実証哲学講義』(1830-1842) 同様に

---

1 ジャン・グロンダンは解釈学を歴史的かつ哲学的に説明する際に、「解釈学の先史時代」に一章を割いている。Cf. Jean Grondin, *Introduction to Philosophical Hermeneutics*, foreword by Hans-Georg Gadamer, translated by Joel Weinsheimer, Yale University Press, New Haven and London, 1991. [*Einführung in die philosophische Hermeneutik*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, Germany, 1991]

重要な著作となった『実証的精神論』<sup>2</sup> (1844) の中で、コントは「positif」あるいは「positivité」という語の意味を、相対する概念を並記させることで5つ挙げている。

まず最初にわれわれは「最も古く最も共通した」基礎の上に「現実的なもの」と「妄想的なもの」の対立を見いだすことになる<sup>3</sup>。「positif」ということばのこうした受容は「新しい精神の哲学」が妄想的なキマイラの「計り知れない神秘」と戦う際の知性を確約するものである。この最初の意味に続いて、「positif」ということばは「無益なもの」に対する「有益なもの」をあらわすとされる。この第二の性質によって、実証的精神は不断に「個人および集団の真の条件をたゆまず改善する」ことに奉仕しようとし、そうすることで「不毛な好奇心」<sup>4</sup>に甘んずるのを避けることができるようになる。この第二の対立から出て重要性を獲得するのが「確実さ」であり、これは「不確実さ」と対立する。「確実さ」は実証哲学が「個人において論理的調和をそして主全体にとっては精神の一体感」を「古い精神世界」<sup>5</sup>の外側に作り上げることを可能にするものである。「確実さ」という第三のことばの意味から派生して、「positif」ということばはさらに、「曖昧なもの」に対する「明確なもの」を指ししめす。このことは実証主義の哲学者に対して、「至る所で現象の性質と相容れる精確さ、さらにわれわれの真の要求に応える精確さという次元を獲得する」よう促し、「超自然的な権限で」曖昧な意見に拘泥しないことを求めるものになっている<sup>6</sup>。「positif」ということばのこれら四つの意味によって、新たな哲学としての実証哲学を神学や形而上学の「当初の」哲学から区別することが可能になるのである。

最後の意味は「ポジティブなもの」と「ネガティブなもの」ということばから生み出された対立によって示されており、それはコントの実証主義において最も突出した性質の一つを説明している。先行する哲学においては一つの体系を作ろうとする真の意志が欠落しているために、解くことのできない問題はそこにおい

2 Auguste Comte, *Discours sur l'Esprit positif*, Carilian-Gœury et V<sup>o</sup> Dalmont, 1844. 1995年版の序文を著したアニー・プティによれば、『実証精神論』はコントがそれまでに発表していたテーマの要約あるいは限定的な総括になっており、そこからさらにコントの関心が向かっていた道徳的社会的問題へと発展していく出発点となるものであった。(Annie Petit, « Introduction » au *Discours sur l'esprit positif*, J. Vrin, 1995, pp. 22-23.) コントの日本語訳については次を参照した：オーギュスト・コント、『実証精神論』、霧生和夫訳、世界の名著 36、『コント・スペンサー』、中央公論社、1970年、pp. 141-233. ただし、本文および注での書誌情報は原書に拠っている。

3 A. Comte, *ibid.*, p. 41 : « Considéré d'abord dans son acception la plus ancienne et la plus commune, le mot positif désigne le réel, par opposition au chimérique : sous ce rapport, il convient pleinement au nouvel esprit philosophique, ainsi caractérisé d'après sa constante consécration aux recherches vraiment accessibles à notre intelligence, à l'exclusion permanente des impénétrables mystères dont s'occupait surtout son enfance. »

この定義はジョン・ロックの考えと関連づけることができるかもしれない。ロックは、『人間知性論』(第2巻第30章1)の中で、事物とそれらの事物から演繹された観念との間に3つの可能な関係性を想定している：「観念についてすでに述べておいたことのほかに、観念がとられるもとの事物との、いいかえれば、観念が表象すると想定される事物との関連で、別に考察することが観念にある。そこで、観念は三とおりに区別できると思う。それはこうだ。第一、実在的か空想的(chimériques)か。第二、十全か十全でないか。第三、真か偽か。」ロックがここで「chimériques」ということばで考えていたのは、「自然になんの根拠ももたないし、原型として暗黙裡に関連させられる実在の存有者とすこしも合致しない」ような観念であった。(Cf. John Locke, *An Essay concerning human understanding*, ed. by P. Nidditch, Oxford, Clarendon Press, 1975, p. 372. (ジョン・ロック、大槻春彦訳、『人間知性論』、岩波文庫、岩波書店、1976年。ただし、本文および注での書誌情報は原書に拠っている。))

4 *Ibid.*, p. 42 : « En un second sens, très-voisin du précédent, mais pourtant distinct, ce terme fondamental indique le contraste de l'utile et l'oiseux : alors il rappelle, en philosophie, la destination nécessaire de toutes nos saines spéculations pour l'amélioration continue de notre vraie condition, individuelle et collective, au lieu de la vaine satisfaction d'une stérile curiosité. »

5 *Ibid.* : « elle [=l'opposition entre la certitude et l'indécision] indique ainsi l'aptitude caractéristique d'une telle philosophie à constituer spontanément dans l'espèce entière, au lieu de ces doutes indéfinis et de ces débats interminables que devait susciter l'antique régime mental. »

6 *Ibid.* : « ce sens [=opposer le précis au vague] rappelle la tendance constante du véritable esprit philosophique à obtenir partout le degré de précision compatible avec la nature des phénomènes et conforme à l'exigence de nos vrais besoins ; tandis que l'ancienne manière de philosopher conduisait nécessairement à des opinions vagues, ne comportant une indispensable discipline que d'après une compression permanente, appuyée sur une autorité surnaturelle. »

て考察対象から外されることとなる。一方で実証主義は、この部分的な否定を受け入れる体系から離れて、「至る所で絶対的なものを相対的なものに代える傾向」を持つことになる<sup>7</sup>。かくして「ポジティブなもの」は「相対的なもの」をその意味論的領野に含むにいたる。こうした対立によってコントは、「positif」ということばの体系的な性格を強調していると考えられるだろう。というのも、この新しい実証哲学が目指しているのは、関連する要素の明らかな類縁性から発して事物の相対性を打ち立てることなのである。

コントにとっては、神学的なものであれ形而上学的なものであれ、体系とはその絶対的な排他性に特徴付けられており、他の主義主張に反対することで不条理な折衷主義に陥ってしまうものである。しかしながら、実証主義はその「相対的な」性質のおかげで、自由に扱うことのできる与件のすべてを、それらの与件がどんなに矛盾して見える場合にも正しく評価することができるのである。このことは実証主義が相反する主義主張に容易に譲歩することを意味するのではなく、むしろ実証主義が体系的な柔軟性と堅牢性の共存を実現していることを意味する。換言すれば、実証主義の相対的な性質によって、モノを他のモノに関連づけることが可能になるのである。

事実、神学であれ形而上学であれ、古い教理は絶対的性質のものであったために、必然的に一つの教理は他のあらゆる教理に対して否定的にならざるをえなかった。でなければ、それ自体、不合理な折衷主義に陥ってしまったであろう。これに対して新しい哲学は、その相対的特性のおかげで、自己に正面から対立する理論でも、その固有の価値を正しく判断することができるし、しかもなお、自己の見地の明晰さ、決定の堅固さを損なう恐れのあるような無益な妥協に陥ることがない。このような次第で、この最終的哲学の通称としてここに用いられた「実証的」という表現が、すべての賢明な人々にとって、今後は、そのさまざまな特質の完全な実際の結合を意味するようになることは、十分に推測できる。<sup>8</sup>

実証主義が正反対の議論を受け入れるのは、実証主義がもっとも異論の余地のない意見を未解決に差し戻そうとするからであり、そうすることで実証主義は、それらの意見を他の要素とともに、「必要な抽象化」<sup>9</sup>を伴う一般化が施された体系の中に再度組み込むのである。先行する哲学と同じ領域を探求しつつも、実証主義が実現されるのは、あらゆる理論に内在する経験的な単なる常識の体系的拡張としてなのである<sup>10</sup>。最も矛盾する要素を一般性をもつ方法によって一つの体系を構築しようというこの実証主義的な意志は、コントにおける実定性あるいは実証主義の概念化を強調しているのであり、それはさらに論理や解釈といった人間の能力から実践されることを前提としているのである。

## 2. フーコーにおける非人間化された「実定性」——『言葉と物』

『言葉と物』の出版後に出された批判にもかかわらず、前述した5つのうちこの最後の意味こそが、フーコーがコントにおける「positif」という語に与えた意味であるように思われる。無論、注意しておかなければならないが、コントの実証哲学はフーコーの哲学的土壌とは全く異なる土壌で展開されていた。ジョルジュ・

7 *Ibid.*, pp. 43–44 : « Le seul caractère essentiel du nouvel esprit philosophique qui ne soit pas encore indiqué directement par le mot *positif*, consiste dans sa tendance nécessaire à substituer partout le relatif à l'absolu. Mais ce grand attribut, à la fois scientifique et logique, est tellement inhérent à la nature fondamentale des connaissances réelles, que sa considération générale ne tardera pas à se lier intimement aux divers aspects que cette formule combine déjà, quand le moderne régime intellectuel, jusqu'ici partiel et empirique, passera communément à l'état systématique. »

8 *Ibid.*, p. 44.

9 *Ibid.*, p. 45 : « Toute les différence essentielle [entre le positivisme et la philosophie initiale] consiste dans la généralité systématique de l'un, tenant à son abstraction nécessaire, opposée à l'incohérente spécialité de l'autre, toujours occupé du concret. »

10 *Ibid.* : « Il importe beaucoup de sentir que, sous tous les aspects essentiels, le véritable esprit philosophique consiste surtout dans l'extension systématique du simple bon sens à toutes les spéculations vraiment accessibles. »

カンギュームも、フーコーの『言葉と物』出版の二年後に出された書評<sup>11</sup>の中で、実存主義者たちが著した書評<sup>12</sup>に言及して述べているように、二人の哲学者の間に安易な類縁関係を打ち立てることは間違っているだろう。しかしながら、そうであってなお、フーコーの作品の中にコントの声を聞く可能性は残されているのであり、そのことはこの「positivité」という概念に関して特に妥当するのである。ただ、『言葉と物』および『知の考古学』の中にコントに対するフーコーの類似性の跡をたどるは難しい。『言葉と物』から例を一つ取り上げよう。

コント流のさまざまな分類法や線状の階層的秩序の威光を脱することは難しい。しかし、数学から出発してあらゆる近代の知を一行に並べようとするのは、認識の客観性という唯一の観点に、知の実定性、知の存在様態、歴史の中で知にその対象と形態とをあたえるあの可能性の諸条件への知の根づき、といった問題を従属させることにほかなるまい。<sup>13</sup>

フーコーは作品の中で三度しかその名前を引用しておらず、そのうちの一つ、それが上に引用したものが、そこにおいてわれわれは彼の名が「positivité」という語の側に置かれていることを確認するのである。周知のように、コントの思想は線状的で階層的な進化という点で特徴的であって、それについては「三つのことなる理論的状态」の契機に応じた人間性の知性の全体的進化に関する偉大な法則という考え方が示しているとおりである<sup>14</sup>。この法則によれば、歴史の展開に応じて神学、形而上学、実証主義という三つの段階が進展するとされる。フーコーはここに引用したテキストにおいて、事物の線状性を批判する一方で、コント流の線状的な思考を逃れることが難しいことを認めている。フーコーによれば、現代の知にとって重要なのは、それは「認識の客観性」であり、そこから「知の実定性、知の存在様態、知の根づき」の問題が派生してくるのである。このことはフーコーの思想がわれわれの認識と知識の彼岸を扱っていることを浮き彫りにする。というのも、フーコーは「知の実定性の問題」を「認識の客観性」という唯一の審級に従属させようとはしていないからであり、そこからさらに、フーコーが『言葉と物』に続いて刊行されたいくつかのインタビューの中でヒューマニズムに対する批判を繰り返していることを考えると、この彼岸ということばが人間という審級を含意するとも考えることができるのである。

私は人文科学が「人間的な」何か——人間の真実、人間の本質、その誕生、その運命——そうしたものの発見をめざしているとは全く思いません。さまざまな人文科学が実際に携わっているものは人間と

11 Georges Canguilhem, « Mort de l'Homme ou épuisement du Cogito », dans *Critique*, n° 242, 1966, p. 603 : « Faire de Foucault une sorte de géologue revient à dire qu'il naturalise la culture en la retirant à l'histoire. Les enfants de Marie de l'existentialisme peuvent alors le taxer de positivisme, injure suprême ».

この点に関して、例えばミケル・デュフレンヌは出版から三年を経てなお『言葉と物』におけるフーコーの思想を「新実証主義」であるとしている：cf. Mikel Dufrenne, « La Philosophie du néo-positivisme », dans *Esprit*, vol. 35, n° 360, mai 1967, pp. 781-800.

12 『言葉と物』に対して「実証主義」ということばを使った論評は、『アルク』誌に掲載されたジャン＝ポール・サルトルとベルナール・パンゲとの対談の中で最初に確認することができる：« Les écrivains de *Tel Quel* le savent. Seulement, ce qu'ils contestent, c'est le langage en tant qu'instrument de communication et d'expression. Ils aboutissent ainsi à une sorte de positivisme littéraire qui correspond au positivisme des signes dont nous parlions à l'instant. Je vois là une démission. Car vous supprimez la communication, vous supprimez aussi la littérature qui ne vit que de ce dépassement. » (p. 89). サルトルに続いてミシェル・アミオとシルヴィ・ル・ボンが1967年1月号の『レ・タン・モデルヌ』誌に長い論文を発表し、さらにフーコーはアミオの論文に対して返信を出している (Michel Amiot, « Le Relativisme culturaliste de Michel Foucault », dans *les Temps modernes*, n° 248, janvier 1967, pp. 1271-1298; repris dans *Les Mots et les Choses de Michel Foucault, Regards critiques 1966-1968*, Presses universitaires de Caen — IMEC éditeur, 2009, pp. 93-129 ; « Lettre de Michel Foucault du 8 mars 1967 en réponse à Michel Amiot », dans *ibid.*, pp. 131-143; et Sylvie Le Bon, « Un Positiviste désespéré : Michel Foucault », dans *les Temps modernes*, n° 248, janvier 1967, pp. 1299-1319)。

13 *MC*, p. 357.

14 A. Petit, *op. cit.*, p. 23.

は全く異なる何かなのです。それはシステムであり、構造であり、結合であり、形態などなのです。その結果、私たちが真剣に人文科学に携わるといふのであれば、何よりもこの昏蒙としたキマイラを壊してしまわねばならないでしょう。というのもそれこそが、人間を探求しなければならないとする考えが生み出しているものなのですから。<sup>15</sup>

フーコーはこのようにして人文科学の領域から人間を追い払うことを提案するのである。そこから、たとえばフーコー的な「実定性」の考え方がコント的な考え方に続いているとしても、人間という審級を消し去ろうとする意志はフーコー独自のものであると、われわれは考えることができるだろう。

このようにして、フーコーは人文諸科学に特別な空間を守ると主張し、現代のエピステーメーに三つの経験的かつ本質的次元を認め、そのエピステーメーを「経験の三面角」と呼んでいる。これらの次元はまず最初に数学と物理学とで構成され、続いて「不連続的だがたがいに類似した諸要素を関係づける」経験諸科学によって構成され、そして最後に哲学的省察の諸科学によって構成される。しかし人文諸科学はこの三角面から排除されて位置づけられる。人文諸科学は「生き話し生産するかぎりにおいての人間を対象とする」。しかし、労働、生命、言語という三つの主要な対象は分析の対象とは見なされないのであり、むしろそれらはそこから出発して各々の実定性 *positivité* が与えられるものなのである。

人文諸科学は、人間は本性において何であるかの分析ではなく、むしろ、人間がその実定性においてそうであるところのもの（生き働き話す存在）と、その同じ存在に対して、生命とは何か、労働の本質とその諸法則とは何に存しているか、どのようにして話すことができるか、知ること（もしくは知ろうとつとめること）を可能にするものとの、その二つのもののあいだを覆う分析である。<sup>16</sup>

これらのことばに読み取ることができるように、フーコーが目指しているのは、人文諸科学の対象として、その存在様態の即自として、現れるがままの質を受け取ることではなく、むしろ人文諸科学の分析を人間と人間の知の条件との間に差し挟むことである。それ故、こうした態度においてもはや人間存在とは何かを問うことは問題とはならないのであり、むしろ人間であるための条件とは何かを問うよう促されるのである。こうしてフーコーは「*positivité*」ということばに、ことばの品質的用法を超えて物質的なコノテーションを与えるにいたるのである。こうした分析は、この「*positivité*」という語がしばしば複数形で用いられ、その実体的な特徴が強調されていることでも裏付けられるだろう。

秩序に関する一般的な学問。表象を分析する記号の理論。同一性と相違性との秩序ある表への配分、古典主義時代において、経験性の空間はこのように構成された。この空間は、ルネサンスの終わりまでには実在しなかったものであり、また、19世紀初頭には消滅する運命にある。それは、今日のわれわれには復元するのがきわめて困難なうえ、われわれの知が所属する実定的諸領域の体系によってきわめて深く覆われているため、長いあいだ気づかれぬまま過ぎてきた。人々は、われわれの時代の範疇や裁断の仕方をつうじて、この空間を歪曲し隠蔽している。<sup>17</sup>

フーコーは上の引用によって、〈マテシス〉と〈タクシノミア〉と〈発生論〉とで構成されている古典主義時代のエピステーメーの一側面についての考察を開始する。この時代、人々は単純な自然を秩序づけるために〈マテシス〉という概念あるいは代数学に依拠したが、その一方で〈タクシノミア〉あるいは記号のシ

<sup>15</sup> *DE I*, p. 644.

<sup>16</sup> *MC*, pp. 364–365.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 86.

システムを複雑な自然を秩序づけるのに供したが、それは結局〈マテシス〉を参照するものであった。それに対して発生論は「経験的なものの列から出発していかにして秩序が成立するかを分析する」<sup>18</sup>。こうしてフーコーは、「〈マテシス〉、〈タクシノミア〉、〈発生論〉という三つの概念が、べつべつの領域というよりも、古典主義時代における知の一般的布置を規定する緊密な相互依存の網目を指示すること」<sup>19</sup>と主張するのである。

さらにわれわれはこの引用したこの箇所において、エピステーメーの別の一面、すなわち通時的な性質をも確認することができるだろう。このシステムがある一定の期間有効なものとしてとどまるが、それがあるとき変質すると、別のシステムに生きている人からは以前のシステムにアクセスすることができなくなってしまうだろう。このことがシステムのあるいはエピステーメーの進化的性質を示しているといえよう。

この引用に関連してわれわれの注意を各概念の定義に対してではなく、それらの相対的な側面に引きつけようとしているのは、それはフーコーの概念のコント的な類似性を強調するためでもある。これら三つの概念の各々はそれ自身に固有の「経験性の空間」を形成すると考えられるだろう。しかし、三つの概念の各々は、それらが持つ自律性を超えて、フーコーはわれわれの眼前に一つのシステムの必要性を提起するのであり、そうしたシステムの中において時代の知を形成するためにそれらの概念はほかの概念に関連づけられる。ところでこのシステムは実定性からなるとされるのである以上、われわれとしては、これらの知の構成要素としてあるいは知識としての実定性がわれわれの知の基礎的システムを構築していると思なすことは十分可能であると思われる。こうしてコントにおけるように品質的な意味の中に止まるのとは異なり、フーコーにおける実定性の概念は対照的で具体的な意味を有するのであり、そこからシステムや知を構成する個々の要素を示すことになるのである。

この実定性のシステム、あるいはより正確にはシステム内における実定性の存在様態は作品中で、布置という別の様相を帯びることになる。次の例を見ておこう。

たしかに現象の総体は容易に指定できる日付（両極限は1775年および1825年である）のあいだに位置してはいるものの、考察の対象となる各領域において、ほぼ1795–1800年前後に接続する二つの継起的局面が認められるからである。第一の局面においては、実定的諸領域の基本的存在様態は変化しない。人間の富、自然界の種、諸言語を構成する語はなお、それらが古典主義時代においてあったところのもの、すなわち、二重化された表象——みずから表象であると同時に、諸表象を指示し、分析し、合成し、分解する役割をおび、かくて諸表象のうちにそれらの同一性と相違性の体系とともに秩序の一般的原理を出現させるもの——でありつづける。[...] 第二の局面において [...] それは、実定的諸領域の布置、すなわち、それぞれに実定的領域の内部で表象的諸要素が相互の関係において機能する仕方、それらが指示と分節化の二重の役割を果たす仕方、それらが比較の働きによって秩序を設定する仕方にほかならない。この章ではこの第一の局面が考察されることとなる。<sup>20</sup>

実定性の存在様態と表象とのあいだの断絶を明らかにする一方で、フーコーは「実定性の布置」という考え方を示し、そのことで個々の表象的な要素が自らを秩序付け、システム内で他の要素と関係し合いながら一つのシステムを構築することを説明している。以上のことから、われわれは一つのシステム内部において表象的側面を奪われた具体的な要素を実定性が意味しているのだと思なすことができよう。

『言葉と物』を実定性の概念を通して概観することで、われわれは作品の外郭を把握することができる。

18 *Ibid.*, p. 358.

19 *Ibid.*, p. 362.

20 *Ibid.*, p. 233.

第一にフーコーはそのことばにコントが定義した意味、すなわちネガティブに対立するものそして相対的なものとしての意味である。意味論的領野の拡大がそれに続き、そのことばは複数形におかれ、そして対象的かつ具体的な意味を獲得する。そこからエピステーメーという布置的なシステム内の機能が由来している。以上のように、実定性という語を複数性さらには物質性を付与することで、フーコーが人間という審級なしでシステムを形成するという彼の考え方を強めているといえるだろう。

### 3. フォーメーション・ルールとしての実定性——『知の考古学』

以上のような実定性とシステムに関わる考察をフーコーは4年後の『知の考古学』で再び取り上げている。そこにおいてフーコーは彼が前作で表明した考えを修正し補完している。この作品にもたらされた最も重要な修正のうちの一つは「言説 discours」と「言表 énoncé」という概念の導入であろう。

連続性のこれら直接的な諸形態が一たび宙づりにされるや、實際上、一つの分野全体が解放されることになる。一つの広大な分野、しかも明確化されうる分野が。それは、あらゆる有効な言表の総体（それらの言表は当然語られ、書かれていなければならない）によって、出来事に関するそれらの分散のうちに、また、それぞれに固有な審級のうちに、構成される。一つの科学、さまざまな小説、政治的な言説、或る作者の作品、また一冊の書物にさえ、まったく確実にこれらにかかり合う前に、その最初の中立性において扱うべき材料であるのは、言説空間一般における出来事の集まりである。こうして、〈言説＝出来事の純粋な記述〉の企てが、そこに形づくられる統一性探究のための地平として、現れる。<sup>21</sup>

このように言語学に特に依拠することは、『言葉と物』においては、その作品が生物学、経済学、文献学あるいは言語学という三つの領域を中心に展開されていたことから考えても不可能であったといえる。それ故フーコーはこの作品において言語学への転換を果たしたのだと理解することができるだろう。すべての書かれ話されたものそしてすべての「言説空間の出来事」、すなわちすべての言表は広大な空間を構築するのであり、それは「言説的出来事の記述」を企てるよう促す。ここから言説がその個別の空間の中に、記述すべき出来事あるいは「実際の言表」を集めていることが理解される。このようにして『言葉と物』において、実定性とエピステーメーの関係についてこれまでにわれわれが考察したのと同じ図式を確認することができる。つまりエピステーメーは実定性に手助けされて実現されるということである。ところで、フーコーは『知の考古学』において、この同じ図式をただ繰り返しているのではなく、そこに「言説」と「言表」という新たな表紙を与え、そうすることで「形成＝編製の規則（フォーメーション・ルール）」というもう一つの層を差し挟むことを企てるのである。

いくつかの言表の間にかような分散の体系が記述されうる場合には、諸々の対象、言表の種類、概念、主題の選択、などの間に、一個の規則性（さまざまな相関関係、位置、作用、変換に関する一つの秩序）が明確化されうる場合には、〈言説の形成＝編制〉にかかわる、と、慣習上、いわれるであろう。こうして、諸条件や諸帰結について、「科学」、「イデオロギー」、「理論」、「客観性の分野」のごとき、かような分散を示すためには、不十分ながらあまりにも重苦しい語を避けることができよう。この配分の諸要素（対象、言表行為の態様、概念、主題の選択など）が従属する諸条件は、〈形成＝編製の規則〉と呼ばれよう。形成＝編製の規則は、与えられた一言説の或る配分における、存在の（のみならず、共存、保存、変容、消滅などの）諸条件である。<sup>22</sup>

21 AS, pp. 38–39.

22 Ibid., p. 53.

それ故、形成＝編制の規則は、「対象、言表行為の態様、概念、主題の選択」という四つの部分において機能していることになる。そしてそれらの部分は目次でもほぼ同じ見出しを確認することができる。存在の条件として定義されることで、形成＝編制の規則はシステムやエピステーメーを形成することができるようになるための四つの必要条件として仮定されているのである。

実定性を分析すること、それは、いかなる諸規則にしたがって一つの言説＝実践が対象の群れ、言表行為の総体、諸概念の働き、理論的選択のさまざまな系を形成＝編制しうるか、を示すことである。かようにして形成＝編制された諸要素は、明確な理念性の構造をもった一つの科学を構成しない。それらの要素の連関のシステムは、確かにあまり厳密ではない。が、それはまた、経験、伝統、あるいは異質な発見などから由来し、それらを保持する主体の同一性によってのみ結合される互いに積み重ねられた認識でもない。それは、首尾一貫した（あるいはしからざる）諸命題が打ち立てられ、程度の差こそあれ厳密な記述が展開され、検証が行われ、理論が繰り上げられる出発点をなすところのものである。<sup>23</sup>

実定性を分析するということは、すなわち言表を分析し、「どのような規則の下に」諸言表が言説の中に結集するのかを理解することである。それ故、機能的な一つの全体を構築できるような規則を掘り出すことが肝要となる。無論、『言葉と物』において自らが採用した視点と粗描した図式を保持しつつも、フーコーは『知の考古学』において、前述した問題以外の問題についても、理論を洗練したものにしようとしてはいる。たとえば、言説の異なる閾とその年代順的歴史、諸科学の歴史の様々な類型、知とイデオロギーの関係などである。しかし、これらの精緻化が実行されるのは『言葉と物』における図式と同様の実定性の図式の中においてのみでしかなく、そこでの主要な修正といえば、言語学的用語において、システムが実定性としての言表によって自らを形成し、規則によって自らを機能させていることを説明づけていることなのである。今やわれわれは『知の考古学』を前作と較べて特徴づけているものを知っている。「規則」という概念をシステムの形成の中に導入したことと言語学的用語を多く用いたこと、これらの二点が作品に導入されるのは、システムから「人間」という考え方を排除するのをより強力に推し進めるためなのである<sup>24</sup>。

フーコーにおけるこれらの理論的強化にもかかわらず、われわれは彼の思考の中に一つの矛盾点があるように思える。それはすなわち、フーコーは自らの理論から人間という進級を削除しようとしつつ、他方においてその理論化の過程で言語活動という非常に人間的な別の審級を導入するのである。すなわち彼はシステムを記述しようとする際に、その物質的自律性によって特徴づけられている実定性の概念を基礎に据えているのである。かくしてシステムは複数性に対して自らを守りあるいは守ると主張するようになる。換言すれば、フーコーのシステムは単数にとどまり複数性をわれわれに保証することができないのである。しかし何の複数性だろう？ システムの複数性である。フーコーがこのシステムあるいはエピステーメーを言説ということばで説明している以上、言説の複数性が、つまり意味の複数性が問題となるのである。

## おわりに

フーコーのエピステーメーについての議論が19世紀的な哲学を現代へと推し進める価値を持つというのは本当だが、それにも欠点がないわけではないのである。エピステーメーの概念によって「実定性」の秩序が如何にして構築されるかが説明されるとしても、その概念は秩序の、そして意味の複数性の可能性を排除している。というのも、フーコーは解釈学が「ディスクールの表面にあらわれた意味を通しての、二次的か

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 237.

<sup>24</sup> フーコーにおける人間という審級の削除から、口頭発表の際にフランソワ・ラスティエ氏が指摘したように、ジル・ドゥルーズと行った彼のニーチェ作品のフランス語訳出版に関わる仕事を思い出すことができる。

つ一時的な、すなわち、より隠され、しかもより基本的な意味の再把握」<sup>25</sup>として考えているからなのである。

本論のはじめに二つの解釈のタイプについて言及したが、結論として、『言葉と物』と『知の考古学』の間の「実定性」の概念に対して行った短い考察を結びつけることができるだろう。フーコーの仕事は言説の文法的解釈の実践として提示されうるが、それは寓意的解釈学実践とは対立するものである。解釈学的実践は一つの言述あるいは一つの言説から出発して複数の意味を求める。それ故二つの解釈学的タイプの融合がテキスト研究や解釈研究においては問題となるのであろう。

#### 参考文献

- MC : Michel Foucault, *Les Mots et les Choses*, Gallimard, 1964. (ミシェル・フーコー, 『言葉と物』, 中村雄二郎訳, 新潮社, 1981年)
- AS : Michel Foucault, *l'Archéologie du Savoir*, Gallimard, 1968. (ミシェル・フーコー, 『知の考古学』, 渡辺一民・佐々木明訳, 新潮社, 1974年)
- DE I : « En intervju med Michel Foucault », *Bonniers Litteräre Magasin*, Stockholm, 37<sup>e</sup> année, n° 3, mars 1968, pp. 203–211 ; repris dans *Foucault Dits et écrits I, 1954–1975*, édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald avec la collaboration de Jacques Lagrange, 1994 (éd. de 2001), pp. 679–690.
- QC : le Cercle d'épistémologie, « Sur l'Archéologie des Sciences, à Michel Foucault », dans *Cahiers pour l'Analyse*, n° 9, 1968, pp. 5–8.
- RC : Michel Foucault, « Réponse au Cercle d'épistémologie », dans *Cahiers pour l'Analyse*, n° 9, 1968, pp. 9–40.
- Georges Canguilhem, « Mort de l'Homme ou épuisement du Cogito », dans *Critique*, n° 242, 1966, pp. 599–618.
- Auguste Comte, *Discours sur l'esprit positif*, Carilian-Gœury et V<sup>o</sup> Dalmont, Paris, 1844. (オーギュスト・コント, 『実証精神論』, 霧生和夫訳 (世界の名著 36, 『コント・スペンサー』, 中央公論社, 1970年), pp. 141–233.)
- Les Mots et les Choses de Michel Foucault, Regards critiques 1966–1968*, Presses universitaires de Caen, 2009.
- Jean-Paul Sartre, « Jean-Paul Sartre répond », dans *l'Arc*, n° 30, 1966, pp. 87–96 ; repris dans *Les Mots et les Choses de Michel Foucault, Regards critiques 1966–1968*, pp. 73–89.
- Michel Amiot, « le Relativisme culturaliste de Michel Foucault », dans *les Temps Modernes*, n° 248, janvier 1967, pp. 1271–1298; repris dans *Les Mots et les Choses de Michel Foucault, Regards critiques 1966–1968*, pp. 91–129.
- Jean Grondin, *Introduction to Philosophical Hermeneutics*, foreword by Hans-Georg Gadamer, translated by Joel Weinsheimer, Yale University Press, New Haven and London, 1991. [*Einführung in die philosophische Hermeneutik*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, Germany, 1991]
- John Locke, *An Essay concerning human understanding*, ed. by P. Nidditch, Oxford, Clarendon Press, 1975. (ジョン・ロック, 大槻春彦訳, 『人間知性論(三)』, 岩波文庫, 岩波書店, 1976年)
- Annie Petit, « Introduction » à *Discours sur l'esprit positif*, coll. « Bibliothèque des Textes philosophiques », J. Vrin, Paris, 1995.

25 MC, p. 384.